

氏 名	バハドゥル ペリヴァントルク Bahadir Pehlivanurk
学位の種類	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 236 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
学位論文題目	‘Small Worlds’ of Overseas Chinese: A Networks Science Approach (華人ネットワークの ‘スモール・ワールド’ : ネットワーク科学の観点)

論文調査委員 (主 査) 教授 中西輝政 教授 西井正弘 教授 間宮陽介

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、Overseas Chineseすなわち華僑・華人（以下華人とのみ略す）の社会構造あるいは社会的機能を、ネットワーク概念によって考察するに際して、Small Worldすなわち「小集団」に関する特別な概念設定及びその他いくつかの独自の理論モデルを新しく適用し、その結果のいくつかを社会機能および社会間関係の新概念として国際関係理論の中に定立することをめざしたものである。

全体で十章から成っており、第一章序論に続いて第二章及び第三章で先ずネットワーク理論とスモール・ワールド論の社会科学理論としての位置づけを行い、論文の理論的前提を提示する。そこでは、従来の代表的論者の理論モデルについて整理しつつ、申請者自身の理論的立場を明らかにしている。

次いで第四章において、華人社会の実態を分析しつつ、そのいくつかの側面の理論的把握に努め、その理論的把握の中から、華人社会の重要な特質としてのクラスター（束）という概念を実態に即して析出することに努めている。

それを受けて第五章においてそのネットワークとクラスターの様々なタイプ分けを行い、その結びつきの強弱について考察する。第六章でいわゆる「ハブ」の類型化が試みられ、個人、制度・組織、都市全体という異なるレベルでのハブ機能を比較考察する。

第七章では、華人社会における経済・社会活動をネットワーク機能としてとらえ、スモール・ワールドの概念を具体的にあてはめて華人経済とその実態においてスモール・ワールド理論の有効性を多くの局面において論証しようと試みる。そこでは、たとえばアジア各地に進出する台湾企業の有するネットワークにおけるスモール・ワールド現象のいくつかが理論的に提示される。また、情報コストにかかわる理論を適用し、そうした華人社会特有の社会機能のもつ優位性のいくつかを紹介している。ついでアジア地域全体から類似した諸例を抽出して政府とビジネスとの関係へとつなげ、政治・国際関係理論への可能性を予備的に提示する。

第八章では、ソーシャル・キャピタル（社会（的）資本）の概念を導入し、華人社会およびアジア型社会関係のモデルへの適用可能性を探り、スモール・ワールド論との関わりを考察している。その際、前提として代表的な諸理論を取上げこれらに検討を加え、たとえばシアン・パイあるいはF.フクヤマらの「関係」、「信頼」概念との異同についても検討が試みられ、その政治への適用の可能性と問題点が論じられている。

第九章では、日本および中国と、華人ネットワークの三者の関係を、これに先立つ各章における検討の上に立って、みずからの理論的立場から考察・分析を試みる。さらにそこから、国際関係理論におけるネーション・ステート（国民国家）アプローチの限界と問題点を探り、ネットワーク理論の上に申請者が構築する諸概念を総合したアプローチを対置し、東アジアにおける国際関係考察の理論的モデルとしての可能性を検討していく。そこでは、たとえばネットワークとしての東アジア文明を論じたトインビーの議論や都市国家、国民国家さらに国境を越えるネットワークの政治的・社会的機能の理論的な検討と比較などが試みられている。そしてグローバリゼーションの進行によって東アジア国際社会の変容の方向と可能性を

考察した上で、主として経済と政治の接点に焦点をあてつつ、みずからの理論的立場の有効性を論証しようとしている。その際主として、ハブとクラスターに関わる問題が中心的に取上げられ、東アジアにおける政治経済全体の理解に対し、上述の理論的なアプローチから生み出された視点がもつ新しい可能性が論究されている。この第九章の後半と最後の第十章の結論において、当初に設定された国際関係研究におけるネットワーク・アプローチの様々な局面での有効性が主張されており、たとえば、国際秩序の変動への対応やディアスポラ諸民族の国際社会における地位の分析、文化的近接性が国際理論において占める位置など、いくつかの局面で自らの理論的立場の有効性を具体的に示すことが試みられている。

以上の所論から、本論文はまず華人社会の特別な機能に着目しつつ、その理論的把握を通じ東アジア地域の諸社会あるいは国内社会、国際社会にまで視野を広げようという志向に立って、その間の理論的可能性と限界、問題点を摘出し、グローバリゼーションの進行によって従来の国際関係理論が直面している問題を独自の視点から明らかにしようと試み、ネットワーク理論の具体的状況に即した精緻化によって国際関係理論の体系の中に一つのモデルを提供することをめざしたものであるとすることができる。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、冷戦終焉後に従来の国際関係理論に対し、大きな観点から様々な見直しや新しいアプローチの必要性が論じられている状況の中で、華人社会という非国家的存在に着目して、グローバリゼーションとの関連において、その理論的把握のもつ国際関係理論への貢献の可能性を探ろうとしたものである。

華人社会という文化的近接性を主要な特質とする社会モデルを、国民国家モデルと対置して、そこに新しい理論的可能性を見出そうとすることには言うまでもなく理論的リスクがつきまとう。しかし本論文は、その大胆な対置を、いくつかの限定を加えつつ慎重に取扱っており、そのためにたとえばネットワーク論を適用するに際して、政治的含蓄を持ちうることを見通した上で、必要な諸概念を華人社会の経済・社会機能の中から経験的に析出してゆく。その一例が、スモール・ワールドの概念であるが、それは又、申請者が、ネットワークとハブの概念で華人社会のネットワーク理解を進めるに当って、その政治的波及や国際的な含蓄を踏まえつつ、ネットワーク理論一般を精緻化した点も、政治学・国際関係の理論研究に一つの貢献をなしたものと評価しうる。また情報コスト、あるいはソーシャル・キャピタルの概念を本論文の理論的な展開の中に取り入れることも、国際秩序の形成にかかわる、現在発展中の様々な理論的営為に対して本論文の行った重要な寄与と見なすことができる。

華人社会の理論的把握が、アジアの諸国においてそれぞれの国民国家的枠組との関連で具体的にもつ、いわゆる理論レベルに関わる問題については、厳密な検討にやや不足が見られる。その点について本論文がもっぱら理論的関心に焦点を置いたものということを考慮に入れたとしても、一つの問題点として指摘しておくべきであろう。しかし本論文の第七章および第八章までの理論的な体系をその全体性においてとらえたなら、この問題点はかなりの程度、相殺されるものとみなしうる。

またネットワーク理論の適用に際して、政策的な目的を投影した形での理論化ないし政策的な方向との整合性を意識した形での自己検証がやや不足している点も見出される。さらに華人社会の歴史の実態に即した、より詳細な考察や、華人社会の歴史的諸条件に由来する理論的限定性についての検証も必ずしも十分ではないといえる。ただ、これらは国際関係理論の研究の現状から見れば、本論文の大きな欠陥とは言い難く、また華人社会を含む東アジアあるいは世界秩序の現状が大きな流動性を見せている今日において、本論文のような理論的関心を中心にした試みにおいてはやや過大な要求であると考えられる。

本論文は、経済、政治、文化にわたる重層的な各レベルを貫いて華人社会をモデルに従来の国際関係理論の体系的なあり方に正面から検討を加える有力な理論的足場を綿密な理論的営為によって組立てつつ提供しており、この点だけでも一つの重要な試みとして、評価が可能である。さらに、文化的側面の諸問題についても、理論研究としてはかなりの程度、深く注意を払い実態面の諸事実について十分な理解に達していると見なすことができる。

本論文の結論については、いわゆる国民国家モデルとグローバリゼーションという、現代世界の最重要課題とされるものの一つに、独自の理論的検討を踏まえた上での斬新な理解の視点と、説得力に富んだ代替的モデルの提示の試みがなされており、この点で従来の諸理論が高度に思弁的ないしより純粋に概念的なレベルに終始してきたことに比して重要な学術的可

能性をもつものと評価しうる。

また、本研究全体に関しては、従来の日本およびアジア地域における、冷戦後の世界秩序に関する国際関係研究における総合性のある理論構築の試みとして、類似した例が殆どないほどのスケールと斬新さを持つ点は十分に評価しうるものである。

以上のように本学位申請論文は、国際社会の政治環境の変容とその理論的把握を目的の一つとして設置された人間・環境学専攻・人間社会論講座にふさわしい内容を備えたものとして高く評価される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成16年2月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。